

報告

沖縄県立看護大学における TOEIC の活用 (第1報)

與那嶺 敦¹⁾ D. Craig WILLCOX¹⁾

学生の客観的英語力を把握することは英語講義をよりよいものにしていくのに必要な活動であると考えられる。平成16年5月、本学において初の試みとなる TOEIC IP を実施した。本研究の目的は、その実施状況を報告しながら、受験生のスコアを分析することにより受験生の英語コミュニケーション能力の現状を把握するとともに、受験生の感想を分析することにより今後の IP や英語講義のあり方を検討することであった。

受験生24名のうち研究への活用へ同意が得られた1～4年生22名を対象にスコア分析をおこなった。また、全受験生を対象に受験直後にアンケート調査、スコア受領後に個人面接をおこなった。

スコア分析からは次の3点が得られた。1) 本学の IP 受験生全体のスコアは、トータル、リスニング、リーディングのいずれをとっても全国の大学 IP 受験生の平均レベルに達していた。2) 学年別のスコアを全国と比較したところ、本学1年生のトータルおよびリスニングが全国より有意に高かった。特にリスニングは、一部の海外経験のある高得点者を除いても有意に高かった。3) 唯一、本学受験生のうち非海外経験者のリーディングスコアが全国平均より有意に低かったが、これは初めての受験で時間配分がうまくできなかったことによるところが大きいと思われる。

受験生の感想からは、特に今後の講義のあり方にとって参考となるさまざまな洞察が得られた。TOEIC の出題形式は現実場面で求められる聴力や速読力を反映しており、講義においても、訓練形態をその形式に近づけそれに慣れさせるようにすれば、TOEIC 受験に役立つだけでなく実践的英語力の養成にもつながるであろう。

キーワード: TOEIC 英語能力 看護

I. 緒言

1. 英語力の客観的評価

学生の客観的英語力を把握することは英語講義をよりよいものにしていくのに必要な活動であると考えられる。また文部科学省は、大学生が「仕事で英語が使える」力を身につけることを期待している¹⁾。幸いにも、これまでにさまざまな英語の検定試験が開発・実施されてきており、それらを英語力の測定法として利用することが可能である。その中で採用されることの多い試験の1つが TOEIC である。

2. TOEIC とは

TOEIC (トイーック) は Test of English for International Communication の略称であり、英語の実践的コミュニケーション能力を測定する世界共通のテストとして約60か国で実施されている²⁾。開発したのは、TOEFL^a など多くの公的テストを実施していることで有名な米国の非営利テスト開発機関 ETS (Educational Testing Service) である³⁾。日本における TOEIC の実施・運営は、財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会があたっている。テストでは、2時間で200の客観式設問に答え、10～990点のトータルスコアが得られる。設問はリスニング (45分間) とリーディング (75分間) の各100問で構成されており、それ

らの受動的な能力を測定することによりスピーキングとライティングという能動的な能力までも含めた総合的なコミュニケーション能力を評価できるように設計されている。スコアは誤差±25点の範囲で常に一定に保たれており⁴⁾、表1に示すようにレベル分けされている。

3. なぜ TOEIC か

TOEIC は、主に日常やビジネスの場面を想定した実用的な出題内容であることから、国内では企業1,803団体、大学・短大885団体など、社会的に幅広く採用されている⁵⁾。「ビジネス」英語といっても経済の専門用語というわけではなく、職種にかかわらず社会人であれば遭遇するであろう事務文書など一般用語の範囲内の語彙という印象である。決して「ビジネス」に偏った内容ではないことは、看護関連であれば熊本赤十字病院や名古屋第二赤十字病院において TOEIC が採用されていることから明らかであろう。国内に限って言えば、類似した形式の試験として主に留学時に求められる TOEFL のスコアより、留学をせずとも社会人として将来 TOEIC のスコアが求められる可能性がより高いと考えられる。また、年に8回全国で実施される TOEIC 公開テストの受験料 (6,615円)⁶⁾ も TOEFL (US\$130: 約14,300円)⁷⁾ に比べて各段に安く、社会人の自己啓発手段として継続的に利用しやすい。

1) 沖縄県立看護大学

^a Test of English as a Foreign Language の略。主に北米の大学・大学院で入学時、留学生に一定の得点が求められることが多い。

與那嶺他：沖縄県立看護大学における TOEIC の活用（第1報）

表1 受験生のスコアとレベル

TOTAL	LISTENING	READING	Level	評価
			A 860+	Non-Nativeとして十分なコミュニケーションができる。自己の経験の範囲内では、専門外の分野の話題に対しても十分な理解とふさわしい表現ができる。Native Speakerの域には一歩隔りがあるとはいえ、語彙・文法・構文のいずれをも正確に把握し、流暢に駆使する力を持っている。
825	460	365	B 730+	どんな状況でも適切なコミュニケーションができる素地を備えている。通常会話は完全に理解でき、応答もはやい。話題が特定分野にわたっても、対応できる力を持っている。業務上も大きな支障はない。正確さと流暢さに個人差があり、文法・構文上の誤りが見受けられる場合もあるが、意思疎通を妨げるほどではない。
710 650 545 540 530 510 505	405 415 355 315 320 315 295	305 235 190 225 210 195 210	C 470+	日常生活のニーズを充足し、限定された範囲内では業務上のコミュニケーションができる。通常会話であれば、要点を理解し、応答にも支障はない。複雑な場面における的確な対応や意思疎通になると、巧拙の差が見られる。基本的な文法・構文は身につけており、表現力の不足はあっても、とにかく自己の意思を伝える語彙を備えている。
415 410 410 395 380 375 375 370 355 345 335 330 320 290	225 275 255 220 270 245 200 175 250 190 205 170 215 180	190 135 155 175 110 130 175 195 105 155 130 160 105 110	D 220+	通常会話で最低限のコミュニケーションができる。ゆっくり話してもらうか、繰り返しや言い換えをしてもらえば、簡単な会話は理解できる。身近な話題であれば応答も可能である。語彙・文法・構文ともに不十分なところは多いが、相手がNon-Nativeに特別な配慮をしてくれる場合には、意思疎通をはかることができる。
			E	コミュニケーションができるまでに至っていない。単純な会話をゆっくり話してもらっても、部分的にしか理解できない。断片的に単語を並べる程度で、実質的な意思疎通の役には立たない。

財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会TOEIC運営委員会：
TOEIC IPテスト受験のしおり(学校用)、2004より転載

4. TOEIC IP とは

TOEIC 運営委員会は TOEIC IP (Institutional Program) (以下「IP」) という名称で団体受験制度を提供している。これは、公開テストとは別に10名以上の受験生が集まれば学校などの団体で日時を自由に設定して TOEIC を実施できる制度である。過去に公開テストで使用された問題が割り当てられるため、IP のスコアは、公開テストと異なり公式認定証は発行されないものの、公開テストのスコアと同等とみなされる⁸⁾。

5. 研究目的

本研究の目的は、平成 16 年 5 月に本学において初めて実施した IP をふまえ、その実施状況を報告しながら、受験生のスコアを分析することにより受験生の英語コミュニケーション能力の現状を把握するとともに、受験生の感想を分析することにより今後の IP や英語講義のあり方を検討することであった。

II. 研究方法

1. 募集

英語の必修科目が開講されている 1・2 年生に対して

は、それぞれ 4 月の第 1 回講義時 (4 月 9・12 日) にインターネットからの資料⁹⁾ を全員に配布して TOEIC の概要を説明したうえで、仮の希望者数を挙手にて確認した。この時点で IP 申し込みに必要な 10 名を超えていたため受験地登録などの事務手続きを進めた。1 週間後の第 2 回講義時 (4 月 16・19 日) に受験申込者を取りまとめた。

3・4 年生に対しては、当初募集する計画はなかったものの、同じように機会を与えてもらいたいという周囲の声を受け、4 月 21 日から 30 日まで学内の掲示板で告知をおこなった。事務局窓口にて前述の資料を配布したうえで申込者を取りまとめていただいた。講義で接する機会がないため、3・4 年生に対する事務連絡には E メールを活用した。

受験料については、委員会側に納める金額を 5 月初旬にあらかじめ一括して現金で預かった。1・2 年生からは第 4 回講義時 (5 月 7・10 日) に、3・4 年生からは指定の日時 (5 月 10 日) に研究室にて領収書と引き換えた。その際、個人に対して発行される無料のスコアレポートとは別に、有料オプションとしてスコアシートや評価通知票¹⁰⁾ が申し込めることも紹介した。

2. オリエンテーション

受験対策として事前に受験者全員に集まってもらう形のオリエンテーションは、時間的な都合からおこなわなかった。その代わりに、1) 語彙リスト¹¹⁾のコピー、2) リスニング・文法練習問題¹²⁾が掲載されたウェブサイトのコピー、3) 参考図書¹³⁾情報を、1・2年生には第3回講義時(4月23・26日)に、3・4年生には受験料預かり時(5月10日)に提供し、前もって学習しておくよう勧めた。試験前日には、全受験予定者に対し試験日時・場所などについて確認のEメールを送った。また、実力がスコアになるべく正しく反映されるようテストの構成や各パートの出題形式を周知させることが必要と考え、試験当日、受験者がほぼそろった段階で約30分のオリエンテーションをおこなった。全員に配布される「TOEIC IPテスト受験のしおり(学校用)」p1を順に読み上げながら、サンプル問題を実際に解かせ、正答の解説を加えた。実際に近い形式になるようリスニングのサンプル問題はネイティブに読み上げてもらった。さらに、問題量が多いことを強調し、1つの問題に時間をかけすぎることのないよう注意を促した。

3. 実施

平成16年5月23日(日)、本学の中講義室にて第1回TOEIC IPを実施した。集合時間は公開テストに近い条件となるよう正午とした。入室時に学生証で本人確認をおこない、受験番号カードを渡して番号順に着席させた。前段のオリエンテーション後、「TOEIC IPテスト実施マニュアル」にそってテストを滞りなく実施した。実施後、前述の有料オプション(スコアシートや評価通知票)への申し込みも取りまとめた。

4. 同意書とアンケート

テスト終了後、全受験者にしばらく残ってもらい、同意書への記入と簡単なアンケートへの回答を依頼した。まず、用紙を全員に配布してから「スコアは個人データではあるものの本学の英語教育にとって貴重な資料となるので活用してもらえないでしょうか」と口頭で依頼したうえで、同意を得られた者から「スコアなどの個人データについて、個人の特定ができない形である限り、今後の研究・教育の目的で使用されることを許可する」という主旨の同意書に学籍番号と署名をもらった。倫理的観点から、「強制ではないので署名しなくても構わない」こともはっきりと伝えた。

同意書の下半分はアンケート回答欄とした。つまり、データ使用に同意した者にとっては記名式、同意しなかったものにとっては無記名式となったわけである。記名は同意者の回答をスコアと照らし合わせるために必要なことと思われた。当初、感想を自由に記述してもらおうと考えたが、受験対策としてやったことや具体的な感想を引き出すために記入要領を白板に用意した。項目は、1) 今回受験す

るにあたっての準備方法とそれについての感想、2) 試験内容についての感想(できるだけ具体的に); a.リスニング、b.リーディング、3) その他、とした。

以上を説明後、書類の回収を受験生の1人に依頼したうえで、著者は同意書への署名に無言のプレッシャーを与えないよう速やかに退室した。

5. スコア通知面接

6月14日から22日にかけて講義後などに研究室にて個人面接の時間を1人3～5分設けた。その際、受験者全員にスコアレポートを渡し改めてスコアを受け取ったの感想を口頭でたずねるとともに、スコアの捉え方を簡単に解説した。また、申込者には代金と引き換えにスコアシートや評価通知票も渡した。解説のポイントは、1) 出題形式に慣れれば実力が正當に反映されること、2) 英語学習を継続し実力が伸びればその分スコアに反映されること、3) 今回のスコアをふまえて次回どれだけ伸びたかをみてもらいたいこと、であった。

6. データ集計・分析

スコアなどのデータの集計・分析には統計ソフトのSPSS 10.0 Jおよび表計算ソフトのExcel 97を利用した。

Ⅲ. 結果

1. 受験者

当初の受験申込者は33名だったが、受験料支払者は25名、実際の受験者は24名であった。最終的にスコア利用の同意を得られたのは22名、男女別では女性20名、男性2名であり、学年別の内訳は1年生10名、2年生6名、3年生5名、4年生1名であった。受験料の預かり時点で8名のキャンセルがあったが参考としてその理由をたずねたところ、「経済的理由」がのべ5名、「準備不足」がのべ3名、「他の予定がある」が1名であった。

2. スコアの全国との比較

1) 全体

本学受験者のスコアは表1のとおりであった。平均トータルスコア(以下「T」)は451(標準偏差138、中央値402.5、最小値290、最大値825)であった。全国で2002年4月から2003年3月までにIPを受験した大学生(以下「全国」)の平均T421と比較すると¹⁴⁾、有意差はみられなかった($t=1.018$, $p=0.320$)。セクション別に比較すると、リスニングスコア(以下「L」)は全国平均236のところ本学平均271($t=1.984$, $p=0.061$)、リーディングスコア(以下「R」)は全国平均185のところ本学平均180($t=-0.348$, $p=0.732$)であり、全国平均と本学平均の間にいずれも有意差はみられなかった。

2) 男女別

TOEIC運営委員会は、IPを受験した全大学生のスコ

與那嶺他：沖縄県立看護大学における TOEIC の活用（第 1 報）

アを男女別にも集計しており、女性平均（T 448）の方が男性平均（T 385）より 16%スコアが高いというデータがでている¹⁵⁾。そこで本学の男性受験者 2 名を除く女性（n=20）平均を全国の女性平均と比較すると、全国 T448、L253、R194 に対し、本学 T450（ $t=0.071$, $p=0.944$ ）、L270（ $t=0.877$, $p=0.391$ ）、R 181（ $t=-0.916$, $p=0.371$ ）であり、全国平均と本学平均との間にいずれも有意差はみられなかった。

3) 学年別

全国の学年別スコアは、学年が進むにつれて高くなる傾向がみられる¹⁶⁾。そこで本学の学年別の平均をそれぞれ全国と比較すると、1 年生は全国：T 373、L 211、R162 に対し、本学（n=10）：T 501（ $t=2.489$, $p=0.034$ ）、L 297（ $t=3.036$, $p=0.014$ ）、R 204（ $t=1.685$, $p=0.126$ ）であり、T と L において本学の方が有意に高かった。一部の海外経験をもつ高得点者（n=2）が平均を押し上げている可能性があったため、彼らをのぞいて再検定したが L については有意に高いままであった（ $t=2.477$, $p=0.042$ ）。2 年生は全国：T422、L239、R183 に対し、本学（n=6）：T 398（ $t=-0.456$, $p=0.668$ ）、L 247（ $t=0.206$, $p=0.845$ ）、R 152（ $t=-1.426$, $p=0.213$ ）でありいずれも有意差はみられなかった。3 年生は全国：T 451、L 251、R 200 に対し、本学（n=5）：T 429（ $t=-0.571$, $p=0.598$ ）、L 252（ $t=0.037$, $p=0.972$ ）、R 177（ $t=-1.707$, $p=0.163$ ）でありいずれも有意差はみられなかった。4 年生は本学の受験生が 1 名であったため検定不可能であった。

4) 海外経験の有無別

TOEIC 運営委員会はまた、「海外経験」を「主として英語を話す生活を送りながら海外に通算 6 か月以上滞在」と定義して受験者にアンケート調査をおこないその有無別にスコアを集計しており、海外経験者平均（T 619）の方が非海外経験者平均（T 410）より 51%スコアが高いというデータがでている¹⁷⁾。そこで、本学の海外経験者 3 名を除く非海外経験者（n=19）平均を全国の非海外経験者平均と比較すると、全国 T 410、L 229、R 181 に対し、本学は T 407（ $t=-0.158$, $p=0.877$ ）、L 246（ $t=1.345$, $p=0.195$ ）、R 161（ $t=-2.227$, $p=0.039$ ）であり、本学平均は全国平均に比べて R が有意に低かった。

5) 英語使用の有無別

TOEIC 運営委員会はさらに、受験者へのアンケートの中で「現在、日常生活において英文を書いたり読んだり、あるいは英語で意思疎通をはかる必要がありますか」と質問し、日常使用の有無別にスコアを集計している¹⁸⁾。しかし、「日常生活」の定義として英語講義が含まれるのかどうか不明であるうえに、「必要がありますか」の部分に反応するかどうかによって回答が分かれる可能性があり、設問の不備は否めない。そのため、この分類による比較は意味をなさないと判断した。

3. 受験者の感想

受験直後のアンケートでは、1) 受験準備：「対策本」

（32%, n=7）や「語彙リスト」（27%, n=6）などを利用したが「時間不足で満足にできなかった」（36%, n=8）、2) -a リスニングセクション：「スピードが速かった」（50%, n=11）、2) -b リーディングセクション：「時間不足」（63%, n=14）、「語彙力不足」（36%, n=8）、「文法力不足」（27%, n=6）、3) その他：「勉強して再度受験したい」（27%, n=6）、「試験時間が長かった」（23%, n=5）などの内容が主にみられた。スコア受領直後の面接では、「思ったよりとれた」（50%, n=11）、「思っていた程度」（27%, n=6）、「思ったよりとれなかった」（18%, n=4）などの内容が主に聞かれた。

IV. 考察

1. 受験者

当初、予想以上の申込者があったものの 8 名（24%）のキャンセルがあった。なかでも受験料の都合がつかないことを理由とした者が 5 名（15%）いたことは注目に値する。IP テストは、公開テストに比べて約 4 割安いですが、それでも経済的負担になる者が少なからず存在することから、受験料の個人負担は今後本学の IP 受験者数の増加を阻む要因の 1 つになるものと予想される。全国的にみると、IP を学生が自発的に受験する機会として実施している大学・短大のうち、約 8 割は全額学生負担としている¹⁹⁾。

2. スコアの全国との比較

本学の受験者は全体としては全国の大学平均レベルに達していた。ただし、これは今回の受験者に限っていえることであり、本学の学生が全体としてそのレベルにあることを表すものではない。データ比較をより正確に分析するためには、両群の構成を検討しておく必要がある。まず、本学に有利にはたらく可能性のある因子の 1 つとして、全員が自発的に受験であったことがあげられる。全国では、平成 14 年 12 月現在 IP を実施している全国の大学（このデータに限り短大を含む）のうち、それを学生が自発的に受験する機会としている学校は 76%（n=212）にのぼる²⁰⁾。それでも何割かの強制受験群が平均スコアを引き下げていると考えられる。

本学の受験者に有利かもしれないもう 1 つの因子は、女性の割合が高かった（9 割）ことである。全国における女性の割合は 6 割であり、4 割の男性群が平均スコアを引き下げていると考えられる。そこで、本学の女性データのみを取り出して全国の女性と比較すると同等であった。

一方、本学受験者のスコアに不利にはたらく可能性のある因子の 1 つとして、上学年（3・4 年）の受験者の割合が少なかった点が考えられたが（1 年から順に 46%、27%、23%、4%）、全国では 1 年から順に 36%、21%、33%、10% であり統計的な差はみられなかった。

そこで、本学の各スコアを学年別に全国と比較したところ、1年生のTとLが全国より有意に高いことがわかった。特にLは、一部の海外経験のある高得点者を除いても有意に高かった。

本学の受験者に不利かもしれないもう1つの因子は、全員が看護専攻であることである。全国の中には英語・英文学専攻学生(平均T457)など平均スコアを押し上げているであろう群が存在する。(全国の看護専攻学生群のデータは明らかになっていない)。

得点差が顕著に表れる「海外経験」者の割合では、全国(5%)と本学(14%)に統計的な差はみられなかった。そこで、非海外経験者のみを取り出して比較したところ、Rにおいて本学の受験者が全国平均レベルに達していないことが判明した。このことは、今回の受験者の9割(n=20)が初めてのTOEIC受験であり、「リーディングの時間が足りなかった」という主旨の感想が6割(n=14)から聞かれたように、時間配分がうまくできなかったことによる影響があるのではないかと推測される。念のため、「時間不足」という感想が聞かれた「時間不足群」(n=14, 平均R177.5)と聞かれなかった「非時間不足群」(n=8, 平均R185)の間で平均Rを比較したが有意差はみられなかった(t=-0.257, p=0.800)。ここで留意すべきことは、「時間不足」という感想はあくまで自発的なものであり、全員に対して回答を求めた質問項目ではない点である。つまり、「非時間不足群」の中にも、時間不足でありながらそのことが感想として出なかった者がいる可能性がある。それはRのより低い者である可能性が高い。というのも、「時間不足」の背後には「時間があれば正答できた」という意味が含まれており、英語力のある程度高い場合に前面に出てくる感想であると考えられるからである。

3. 受験者の感想

1) 受験準備

今回は初めてのIP実施であり、告知してから実施するまでに約1か月しか時間がなかったため、受験者にとっては他の講義の課題などで忙しい中、事前準備が足りなかったのは当然であろう。もっと早めに告知を開始できればよいが、新生生の入学時点のスコアを事前テストとして測定するねらいもあるため、特に新生生にとっては準備期間が短くなるのはいたしかたない。オリエンテーションとして渡した資料については、「語彙リストの単語が出ていたので役立つ」とや「インターネットで問題形式に慣れた」という声があり、効率的な準備という点でおおむね効果があったと思われる。また、受験対策として勉強会を希望する声もあったため今後の検討課題としたい。

2) リスニングセクション

問題文はナチュラルスピードで読まれるうえに、2回繰り返される英検などとは違って1度しか聞くチャンス

が与えられていない。さらに、1つの問題文の読み上げが終わって次に移るまでのポーズ約7~8秒(著者調べ)のうちに解答を選んでマークしなければならない。そのため、受験生はスピーキングのスピードや問題のテンポについていくのに苦労したようである。一見厳しいこの形式も、現実場面を考えてみれば、ネイティブスピーカーに混じってナチュラルスピードの内容を1度で瞬時に理解することを迫られることが多いことから、利にかなった条件設定である。今後、講義においても速聴に慣れるようにリスニング練習を実践する必要がある。田崎²¹⁾もリスニングは言語の自然さをゆがめないためナチュラルスピードで訓練すべきだとしている。練習のために繰り返し聞かせることについては田崎も異論はないものの、定期試験においては、既習教材を出題していることもあり、TOEICなどに合わせて聞くチャンスは1回のみとしてよいかもしれない。また、設問間のポーズ時間も、現在の約10秒から約7~8秒に短縮して妥当かと思われる。

3) リーディングセクション

問題量の多さから解答時間の足りなかった受験生が繰出した。100問中おおまかには文法問題60問、長文問題40問に分かれているものの、後半の長文は15~16題を読みこなさなければならないため、単純に頭割りで平均45秒/問というペースで解答していくことは賢明ではない²²⁾。文法部分を25秒/問、計25分で終われば、長文部分に3分以上(190~200秒)/題、計50分の時間を確保できるという。長文を読む際の理想的なスピードは、概要を記憶に保持できる150語/分(参考:ネイティブスピーカーは250語/分)程度であるが、講義で課しているのは速くても70語程度/分にとどまっている。今後は、IP受験生に上記の時間配分を目安として事前に明確に伝えるとともに、講義において学生の速読レベルを見極めながら、速読力をさらに養成していく必要がある。速読力が必要なのは、TOEICで求められているからというよりも現実場面で求められることの多い能力だからであり、TOEICの出題形式はその現実を反映しているにすぎないことを付け加えておきたい。

4) 今後の方向性(「その他」の感想から)

受験直後に「勉強して再度受験したい」と自ら意欲をみせている学生が少なくないことは、TOEICの趣旨を正しく理解していることの表れであり喜ばしい。「勉強」の中には、「受験対策をする」と「実力をのばす」という2つの意味があると考えられる。TOEIC運営委員会によると、TOEICは信頼性の高いテストであり、過去問題の学習などをつうじてスコアアップした場合は、試験形式に慣れたことにより本来の実力が反映された結果であるとしている²³⁾。ある程度を受験テクニックを身につけることは方略として必要ではあるが、それが目的になってしまうと本来の「英語コミュニケーション力の向上」という目標を見失いかねない。講義においても、現

與那嶺他：沖縄県立看護大学における TOEIC の活用（第 1 報）

在開講されている時間枠内で TOEIC の受験対策コーナーを設ける方法もあるが、それは相対的に本来の学習教材に割り当てられる時間が減ることを意味する。両者のバランスを慎重に見極めなければならない。現時点で考えられるのは、「英語講読 II（選択）」においてテキストが終了した後の回の講義の一部で TOEIC の長文問題を教材として利用することである。

その他にも、本学で IP を実施した点については「学校だと気楽に受けられるのでこれからもおこなってほしい」という声に代表されるように好評であった。その一方で、「試験時間が長かった」と感じる学生も少なくなく、ある学生からは「(問題が) ビジネス重視で(看護専攻学生にとって) 受ける意味があるのか」と疑問も聞かれた。まず、試験結果の信頼性を確保するためには、2 時間という長さは TOEFL の 2 時間半以上と比較しても妥当であろう。次に語彙の専門性については、「緒言」で述べたように「TOEIC に求められる語彙は社会人に共通のあくまで一般的なビジネス英語の範囲内である」という点を正しく理解してもらえようオリエンテーションの一環として説明するようにしたい。

なお、前段の 2 つの論点をクリアする試験として TOEIC Bridge の IP 導入も検討課題としたい。これは、TOEIC の T 450 以下のレベルを対象としているものの、問題は日常的な内容中心であり、時間も 1 時間で済む²⁴⁾。TOEIC よりも手軽な試験として講義時間内にも実施可能であることから、将来、能力別にクラスを分ける手段などとしても利用できる。

さらなる論点として、本学の英語教育で達成された部分と TOEIC で評価される部分との整合性の問題がある。講義で看護関連の教材を用いて身につけた英語力は、本来看護英語に特化した検定試験を用いて評価されるべきであるが、そのような試験は知る限り現存しない。一般的な題材を用いた TOEIC でそれが反映されるかについては見方のわかれるところであり、そのスコアを直接本学の英語教育の成果と結びつけることは危険である。現時点では、TOEIC のスコアは参考程度に扱われるべきであろう。

V. 結論

本学にて TOEIC IP を初めて実施した結果、本学の IP 受験生全体のスコアは、T、L、R のいずれをとっても全国の大学 IP 受験生の平均レベルに達していた。学年別のスコアを全国と比較したところ、本学 1 年生の T および L が全国より有意に高かった。特にリスニングは、一部の海外経験のある高得点者を除いても有意に高かった。唯一、本学受験生のうち非海外経験者の R が全国平均より低かったが、これは初めての受験で時間配分がうまくできなかったことによるところが大きいと思われる。

受験生の感想からは、特に今後の講義のあり方にとつ

て参考となるさまざまな洞察が得られた。TOEIC の出題形式は現実場面で求められる速聴力や速読力を反映しており、講義においても、訓練形態をその形式に近づけそれに慣れさせるようにすれば、TOEIC 受験に役立つだけでなく実践的英語力の養成にもつながるであろう。今後も定期的に IP を実施することにより、学生に自己の英語コミュニケーション力を測定する機会を提供するとともに、今回の受験生に対しては次回の受験も促してスコアにどのような違いが表れるのかを確認したい。

謝辞

今回の TOEIC IP 実施を可能にくださった TOEIC 運営委員会ならびに本学教職員、および本研究に協力してくださった IP 受験生に深く感謝いたします。

文献

- 1) 文部科学大臣：「英語が使える日本人」の育成のための行動計画の策定について、www.mext.go.jp/b_menu/houdou/15/03/030318_a.htm, 2004
- 2) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会：www.toeic.or.jp/toeic, 2003.
- 3) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会：TOEIC テスト活用実態報告第 12 回（平成 15 年 7 月）[冊子]，p0，財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会，2003.
- 4) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会：TOEIC newsletter 66, p 11, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会，1999.
- 5) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会：TOEIC テスト活用実態報告第 12 回（平成 15 年 7 月）[冊子]，p 17, p 101, p 158, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会，2003.
- 6) 同 2
- 7) Educational Testing Service: TOEFL 2003-04 information bulletin for computer-based and paper-based testing, p 4, Educational Testing Service, 2003.
- 8) 同 2
- 9) 同 2
- 10) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会：TOEIC 団体特別受験制度－IP：Institutional Program－[冊子]，pp 8-11, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会，2004.
- 11) 中條清美：英語初級者向け「TOEIC 語彙 1, 2」の選定とその効果，日本大学生産工学部研究報告 B, 36, pp 27-42, 2003.

- 12) ジャパンタイムズ[週間 ST オンライン]: www.japantimes.co.jp/shukan-st/special/toeic/tc-menu.htm, 2004.
- 13) ジャパンタイムズ+コミュニケーション英語研究所編: わかる! はじめて受ける TOEIC テスト, ジャパンタイムズ, 2004.
- 14) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会: TOEIC テスト活用実態報告第12回(平成15年7月)[冊子], p 131, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, 2003.
- 15) 同 14
- 16) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会: TOEIC テスト活用実態報告第12回(平成15年7月)[冊子], p 120, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, 2003.
- 17) 同 14
- 18) 同 14
- 19) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会: TOEIC テスト活用実態報告第12回(平成15年7月)[冊子], p 112, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, 2003.
- 20) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会: TOEIC テスト活用実態報告第12回(平成15年7月)[冊子], p 111, p 120, p 131 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, 2003.
- 21) 田崎清忠: 英語教育理論(再), p 162, 大修館書店, 1985.
- 22) 石井辰哉: TOEIC Test 900 点突破 対策と問題, p 71, p 153, p 155, ベレ出版, 1999.
- 23) 同 2
- 24) 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会: TOEIC テスト/TOEIC Bridge テスト案内学校用[冊子], p 1, 財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 TOEIC 運営委員会, 2004.

Use of TOEIC at Okinawa Prefectural College of Nursing; 1st Report

Atsushi YONAMINE, M.Ed¹⁾. D. Craig WILLCOX, Ph.D¹⁾

Abstract

Assessment of students' English proficiency may be an effective tool to improve English courses. In May 2004, the TOEIC Institutional Program was conducted as an assessment tool for the first time at Okinawa Prefectural College of Nursing (OPCN). The purpose of this study was: 1) analyze examinees' scores in order to grasp their English communication skills; 2) analyze students' ideas regarding improvement of the testing procedures; 3) explore ways in which the OPCN English courses may be improved.

Twenty four freshman to senior students participated as volunteers in the testing program. The scores of the 22 students were analyzed. To collect their feedback, all the test-takers were given an open-ended questionnaire right after the exam, and also interviewed individually when their scores were reported to them.

The score analysis revealed the following three findings: 1) The average scores of the total OPCN group were as high as the national averages of college students in the total score and the sub-scores of listening and reading. 2) The OPCN freshman group marked significantly higher scores in total and listening than their national counterparts. The listening scores remained significantly higher even after excluding several outliers of the students that had experienced living abroad. 3) The reading average of the OPCN group without overseas experience was the only score that was significantly lower than their national counterparts. The main reason may be spurious in that as first-time test-takers they seem to have failed to properly manage time allocation for the 200 item assessment.

The participants' comments provided various useful insights, especially for the future OPCN English courses. One of the major inferred recommendations was to incorporate the TOEIC question styles into future OPCN courses for training and testing purposes. The benefits are that students would not only become better prepared to take TOEIC or a similar type exam, but more importantly, that they would gain opportunity to develop practical skills of speedy comprehension in listening and reading, which are often required in real settings and are reflected on the TOEIC question styles.

Key Words: TOEIC, English proficiency, nursing

1) Okinawa Prefectural College of Nursing